

定九郎 (台詞)

与一兵衛 あー降る雨じゃ降る雨じゃ。雨もよつほど小降りになってきた。どーれ、松の木の下で一服つけようか。

定九郎 オーイ、オーイ。おやじどの。さいぜんから、オーイ、オーイと呼ぶ声がそなたの耳にははいらぬか。これおやじ!

与一兵衛 なもはねや。なもはねや。

定九郎 よい年をしやがって、このぶっそうなる街道を夜道一人旅とはだいたん、だいたん。わしと一諸に道連れになつて行こうか、行かろうか。

与一兵衛 わ、わしや年寄りのことなれば、あとからぶらりぶらりとまいます。おう若旦那様、おさきへ、お先へ。

定九郎 こうりやおやじ、旅は道づれ世は情ということは例えにもあるじゃな。さあさ一諸に一諸に。
(踊り手、唄い手一同へさーわめ さーわめ)

おっととと、堰^{せき}じゃな。このおやじの達者なこと、達者なこと。一斗めしも喰いたるこのしょうのおやじ。そなたのふところに金なれば、四、五十両の金、しまの財布に入っているのをわしや見こんできた。

与一兵衛 いつのこまに見だべや、このどろぼうけしめ!

定九郎 世間の利子は三分の利子。わしや、四分でも五分でも苦しゅうない。どうか、四、五日。うーん、貸してくりや。うーん、貸してくりや。

与一兵衛 とんでもねえや。金もなんにもござんわい。今朝、娘からもろうたかんと米のコンビ焼めし、二つ三つしか

ござんせんわい。

定九郎 おう、さいわいじゃさいわいじゃ。にぎり飯なら腹がすいた。

与一兵衛 ん、ん——。いい腹だちや、んが腹なに腹だてや。

定九郎 酒なればのどがかわいた。案にたがわず持病のシヤクがさしこんできた。

与一兵衛 くだばれ、くだばれ!

定九郎 こーれより、ここにあるもの二尺八寸だてにはささぬウ……。

ここ数年來、郷土芸能の一つとして本町の願人踊りが脚光をあびるようになってきた。その動きを控えてみよう。

昭和四十四年十二月 八ふるさとのうた祭^{マツリ}∥男鹿市立体育館出演

昭和四十六年一月 「雪と氷の祭典^{マツリ}∥北海道」出演

昭和四十六年八月 秋田^{マツリ}∥竿灯祭^{マツリ}に出演

昭和四十六年十一月 県文化功労者の表彰を讃えて県正庁で披露

昭和四十六年十二月 第十三回「民族芸能公演^{マツリ}∥東京国立劇場」に出演

昭和四十八年十二月一日 (県)無形文化財に指定される。

特に国立劇場で二日間にわたって公開された一行十四名の願人踊りは、その奔放さが楽しくリズムカルなものであり、「定九郎」には農民のエネルギーが躍動しているなどと「演劇界」「芸術新聞」「日本経済新聞」に賞讃された。県無形文化財に指定されたのは、それから二年後の四十八年十二月一日のことであった。現在、一日市では「郷土芸術研究会」指導・小柳克二^{キクジ}が組織されており、埋もれた民俗芸能の発掘保存につとめている。